

日本福祉大学大学院

スポーツ科学研究科 スポーツ科学専攻 修士課程

2026 年度 第 1 期入学試験問題

【小論文（AO 入試・一般入試）】

問 1 共通設問

【出題の意図】

この問題は国民のスポーツ実施の世代の特徴、性別ごとの特徴を「スポーツの実施状況等に関する世論調査」の結果から読み取らせる問題である。問題には以下の 3 つの力の有無を問う意図がある。

- ①調査結果の特徴とその背景を考察する科学的思考ができるかどうか。
- ②わが国のスポーツ実施実態に気づき、考察したその背景から我が国のスポーツ政策の課題を導きそれに適切に対処する提案ができるかどうか。
- ③スポーツ科学に関する諸課題を解決しようとする意志と能力（本研究科のアドミッションポリシーに関わる力）があるかどうか。

【解答例】

この図は令和 6 年度の世論調査に基づき、20 歳以上の国民におけるスポーツ実施希望率と実施率を年代・性別ごとに示している。赤線で囲まれた 20 代～40 代女性では、希望率が 6 割前後と比較的高い一方で、実施率は 4 割前後にとどまり、希望と実施の乖離が顕著である。全体としては、年齢が上がるにつれて希望率と実施率の差が縮まり、特に 70 代では男女ともに実施率が高く、健康維持のために運動を日常に取り入れていることがうかがえる。一方、20～40 代女性で実施率が低い背景には、仕事や育児・家事などの多重負担により時間や体力の余裕がないことに加え、託児施設の不足や運動機

会へのアクセスの困難さがある。また、そもそもスポーツに対する関心や優先度が低い女性も少なくない。運動が「得意な人のもの」「若い人や男性のもの」といった固定観念も根強く、自己効力感の欠如や場への心理的抵抗も実施率の低さに影響していると考えられる。

問2 選択設問

領域名	人文社会科学領域
-----	----------

【出題の意図】

この問題は、スポーツの現場で実際に生じた事件から、フェアプレーの内容に触れ考察させる問題である。この問題には以下の3つの意図がある。

- ①フェアプレーの内容が説明できるかどうか。
- ②実際に起こったスポーツに関わる課題に対してスポーツ倫理学の立場から、公正な判断ができるかどうか。
- ③スポーツ科学に関わる基礎的な知識を身につけており、かつ、スポーツ文化の発展に寄与しようとする意識があるかどうか（本研究科アドミッションポリシーの一つ）。

【解答例】

今回の岐阜県のフェンシング予選における「故意の敗退」は、スポーツ倫理の根幹であるフェアプレーの精神に明確に反する行為である。フェアプレーとは、単にルールを守ることにとどまらず、誠実さ・公正さ・尊敬・勇気といった価値に基づき、他者との対等な競争を誠意をもって行うことを意味する。この精神がなければ、競技は単なる勝敗操作や利害調整の場に成り下がり、スポーツ本来の教育的価値は著しく損なわれる。

本件では、対戦者の一方が「わざと負けるよう依頼された」と証言しており、これは明白な不正行為である。その結果、本来出場権を得る可能性があった他校の選手の機会を奪い、スポーツの公平性を著しく侵害した。また、選手自身に対しても、他者の指示によって自らの競技行動を操作されるという点で主体性を奪い、人格形成の妨げとなる。

高校スポーツは、単なる競技成績の向上を目的とするのではなく、生徒の人的成長を促す教育の一環として位置づけられている。その中核にあるべきフェアプレーの理念を指導者や関係者が軽視した場合、生徒は「勝つためには手段を選ばない」という誤った価値観を内面化する危険がある。従って、今回のような事案は、教育現場においても深刻に受け止められるべきである。

フェアプレーは競技の場のみならず、社会において他者と協働する上で必要不可欠な資質を育む土壌である。高校スポーツにおいてこそ、その意義が実践されなければならない。

領域名	自然科学領域
-----	--------

【出題の意図】

本設問は、近年の国際スポーツ大会において議論が活発化している「トランスジェンダーとスポーツ」の問題を題材に、受験者が

- 1)社会的・科学的概念を正確に理解しているか
- 2)与えられた資料内容を踏まえて論点を整理できるか
- 3)スポーツにおける公平性・安全性・包摂性といった価値の対立構造を多角的に考察できるかを評価することを目的とする。

特に、単なる賛否の表明にとどまらず、

- トランスジェンダーの定義を適切に説明した上で
- なぜ競技スポーツにおいて問題となり得るのかを、競技特性や国際競技団体の立場を踏まえて論理的に論述する力を問うものである。

【解答例】

トランスジェンダーとは、生物学的に割り当てられた性別と、自身が認識する性自認が一致しない人々を指す概念である。近年、性の多様性に対する社会的理解が進む中で、スポーツの分野においてもトランスジェンダー選手の参加をどのように扱うかが重要な課題となっている。

スポーツにおいてトランスジェンダーが問題となる背景には、競技の「公平性」および「安全性」が深く関係している。特にボクシングのようなコンタクトスポーツでは、筋力や骨格、身体的強度といった生物学的要因が競技結果や選手の安全に大きな影響を及ぼす。そのため、性別によるカテゴリー分けは、単なる区分ではなく、競技の成立条件として重要な意味を持つ。

提示された記事では、性別適格性を巡る議論の中で、出場資格に関する国際競技団体の判断と、実際に対戦した選手の身体的・心理的負担が浮き彫りになっている。IOCは一定の基準に基づき出場資格を判断しているものの、競技現場では選手の安全や納得感が十分に担保されているとは言い切れない状況が示唆されている。

一方で、トランスジェンダー選手の競技参加を一律に否定することは、人権や社会的包摂の観点から問題がある。したがって、スポーツにおけるトランスジェンダーの課題は、単なる賛否ではなく、競技特性ごとに科学的根拠と安全性を踏まえた基準を慎重に構築する必要がある。

今後は、競技の公平性と選手の人権尊重を両立させるため、国際的な議論と科学的知見に基づく柔軟な制度設計が求められると考えられる。